

『パウロからテモテへ』 (要旨)
 聖書箇所：Ⅱテモテ 2 章 8 節～ 13 節

【1】 苦しみの先にある喜び

苦しいことが続くと、どうしても目の前の苦しい課題にのみ焦点が向けられるようになってしまいます。自分は何のために苦しんでいるのかと、深い徒労感に襲われます。

パウロはテモテの流した涙を知っていました(Ⅱテモテ 1:3-4)。その上でテモテに「苦しみ」そのものと 24 時間向き合って克服するようにと勧めませんでした。

まず、「兵士」のことを考えるよう促します(2:3-4)。兵役それ自体は辛い期間ですが、兵士は自分の雇い主を喜ばせることで、自分に課せられた期間を全うする力を得ることができるのだと。次に「競技者」です(2:5)。競技者の辛い練習を支える原動力はその先に用意されている「栄冠」です。最後に「農夫」です(2:6)。農夫は労苦して田畑を耕作しますが、その労苦を支えるのが「収穫」です。パウロは兵士、競技者、そして農夫を引き合いに出して、彼らが目の前の労苦に押し潰されないでいるのは、労苦の先にある喜びに目を留めているからだと言います。そして目の前の課題に労苦するテモテには「イエス・キリストのことを心に留めていなさい」(2:8)と命じたのです。では、なぜキリストを心に留めることが、苦しみを耐え忍ぶ原動力となるのでしょうか。

【2】 一時的な苦しみと永遠の栄光

パウロは鎖に繋がれ、まさに苦しみの只中にありました(2:9)。しかし彼は絶望しませんでした。彼が苦しみを耐え忍ぶことができたのは、キリストを心に留めていたからです。それゆえにテモテにもキリストを心に留めるよう命じたのです(2:8)。

競技者が栄冠を目指して苦しい練習を耐え、農夫が収穫の日を心待ちにして日々の労苦に耐えるように、目の前の課題に労苦するテモテには、キリストを心に留めることで、やがて「キリスト・イエスにある救いを、永遠の栄光とともに受けるようになる」(2:10)と示したのです。

そしてパウロはどんな大きな苦しみであって、も永遠に続くものではないと理解していました。

彼は別の手紙で「私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたすのです」(Ⅱコリント 4:17)と述べています。パウロが苦難においても希望を失わなかったのは、競技者の栄冠、農夫の収穫と同じように、キリスト者の「永遠の栄光」を待ち望んでいたからです。

【3】 キリストは常に真実である

パウロは手紙の後半で「デマスは今の世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまいました…」(Ⅱテモテ 4:10)と世の友に棄てられた寂しさを記します。たしかに私たちのいのちが「今の世」あるいは「今の時代」で終わるのであれば、状況の変化を俊敏に察知しパウロのもとを去ったデマスが賢いでしょう。しかしパウロは、そのいのちが「今の世」で終わらないことを知っていましたので、耐え忍び、「永遠の栄光」を待ち望んだのです。

「私たちがキリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きるようになる。耐え忍んでいるなら、キリストとともに王となる…私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。」

(2:11-13) 当時の教会で歌われた賛美の一節のようです(William D. Mounce)。パウロやテモテも口ずさんでいた賛美であったのかもしれませんが。ここで言われる「私たち」は、パウロやテモテ、そしてキリストを信じる全ての者たちです。キリストとともに死に、生きる(2:11)とは、キリストを信じる者のバプテスマと新生のことです(参照:ローマ 6:8)。

キリストを信じる者も苦しみ、悩み、そして葛藤します。信頼した親しい友に棄てられることもあります。しかし「私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である」(2:13)ので、私たちは永遠の栄光を待ち望むことができるのです。

▷私たちは今朝、「誰に」、「何に」、心を留めているでしょうか。

